

日野田崇 「着地した光の音楽」

会期：2026年10月3日(土)～10月24日(土) ※日・月・祝休廊

時間：12:00 - 18:00 / 場所：imura art gallery

・ギャラリートーク 10月3日(土) 16:00- 日野田崇×青木加苗(和歌山県立近代美術館 学芸員)



So You Want To Be A Rock 'N' Roll Star
ceramic, 66×40×31cm, 2026
©Kazuo Fukunaga(Photo)

imura art galleryでは、2026年10月3日(土)より、日野田崇による個展「着地した光の音楽」を開催いたします。

本展では、日野田が近年取り組んできた「手色形楽(しゅしきけいがく)」の現在形として、新作7点を発表します。日野田は、「手色形楽」という独自の言葉・概念を掲げ、色やかたちそのものが本来持つ価値や面白さを捉え直す試みを続けています。大衆文化をはじめ、陶芸、即興音楽における和声やリズムの形式など、異なる領域から要素を取り込み、それらを融合させながら、新たな造形表現へと展開していきます。

近年の日野田の制作では、色やかたちを決定するための独自のルールが、より明確に取り入れられるようになっていきます。以前は感覚的に行っていた色彩や造形の選択も、現在では徐々にシステムティックな方法へと変化しています。色やかたちを偶然や感覚だけに委ねるのではなく、一定の関係性やルールを設定することで、造形そのものの可能性を探っています。

こうした制作姿勢の背景には、音楽に親しんできた日野田の経験があります。とりわけ、ロシアの作曲家アレクサンドル・スクリャービンが試みた「色と音」を結びつける考え方からもインスピレーションを得ています。

音楽における和声やリズムのように、色やかたちにも一定の関係性や構造を見だし、それを造形へと展開します。日野田は、音と色のあいだに独自の対応関係を設定しながら、色彩や造形を決定する方法を模索しています。こうした試みは、目に見えない音楽的な構造を、色やかたちを通して具体的な立体へと変換するものです。

音から色へ、色からかたちへ。そして、それらが陶として「着地」する。

その過程から生まれる新たな作品群を通して、日野田が探求する「手色形楽」の現在をご覧くださいと幸いです。

—作家ステイトメント

この数年、分散していた自分の興味関心をひとつに結びあわせていくための方法論の構築に取り組んできた。私はそれを「手色形楽(しゅしきけいがく)」という造語で呼んできた。そのいくつかの要素の中でも重要だったのが、聴覚芸術である音楽、それも20世紀以降の大衆音楽の構造を、視覚芸術、立体の造形に取り込めないかと考えてきたことである。20世紀の後半以降の音楽、とくに大衆音楽の世界の構造的な特徴は、伝統的な音楽からすると不協和音的、調性から外れたように聞こえるものも使うこと、近代西洋以外に由来するリズムの文化を大幅に導入したことである。

私が自分の制作において成したいと願うことのひとつは、マルセル・デュシャン以降の理知的なArtの系譜にあるものではなく、その対極にある、彼が生前嫌っていた「網膜的な」ものを、「聴く」という方向から再考する試みである。

具体的には、まずはじめに、個々の色の性格にではなく、複数の色と色の関係性に積極的な意味を見いだすという方法を使っている。私が参考にしたのは色彩を学ぶ過程で時折使われることのある12色相環である。そこに西洋音楽の発明品である平均律12音階の音程を当てはめていった。たとえば、赤色をC、緑青色をGといった具合にである。つまり、色と色の関係性はインターヴァル(音程差)によって決まることになる。そこに見られるこの色の関係性を、和声の組み立てや進行によって特徴づけ、それにもとづいて予めつくられた色彩チャートに沿って陶作品の彩色をしていく試みを、最近の制作で実践してきた。

陶芸材料の色材は、もともと地殻に眠っていた鉱物由来のものである。それは天上からやってきた光と反応して何らかの波長の色を呈するが、あくまでもそれは物質的なものである。しかもそれを高温で焼くことによって焼結させる必要がある。その発色の性質に起因する問題(使える色相や彩度が限定されていたり、偏りがあったりすること)がさまざまにある。くわえて、平均律は利便性がある一方で、音楽のすべてを表現できるわけでもない。そのような課題はあるものの、これまでの試行錯誤としてまとめられたのが今回の出展作品である。この中には、セロニアス・モンクの「ブルー・モンク」やジョン・コルトレーンの「ジャイアント・ステップス」のような既存の曲をもとに可視化したものもあれば、単に楽器をさわっていて書き留められた断片的なコードの流れをもとにしたものもある。何れにせよ、先述の方法によって私の色彩に対する感覚はまったく一新された。思い返せば、子どもの時分から、私は色彩を使うことに対して非常に強いコンプレックスを抱えてきたので、それからするとずいぶんな飛躍である。これは大げさに言えば、世界の調和原理の感じ方が変わったということなのだろう。そして、この方法は誰にとっても開かれているものでもある。

音、色、かたち、リズムに敬虔に学び、楽しむ気さえあれば。

■略歴

1968 兵庫県生まれ
1991 大阪芸術大学芸術学部工芸学科陶芸コース卒業
現在 嵯峨美術大学(旧:京都嵯峨芸術大学) 教授
京田辺市に在住、制作する

■主な個展

1992 ギャラリー白(大阪)('97~ '99, '01)
1993 ギャラリーマロニエ(京都) ('95, '96)
1995 INAX(現:LIXIL)ガレリアセラミカ(東京)
1997 「土と石を焼く」INAX(現:LIXIL)ギャラリー 2(東京)
2000 「地中の時間とかたちを焼く」世界のタイル博物館(愛知)
2003 「No Assurance」キュービックギャラリー(大阪)
2004 「Townfolk」galerie 16(京都)
「Dazed」キュービックギャラリー(大阪)
2005 「Takashi Hinoda」Gallery Pahk(アメリカ/ニューヨーク)
「Mollusc Republic」ガレリアフィナルテ(愛知)
「Takashi Hinoda」Dai Ichi Gallery(アメリカ/ニューヨーク)
2006 「Entartete」galerie 16(京都)
2007 「Collapsing Perspective」ガレリアフィナルテ(愛知)
2008 「Collapsing Perspective」Gallery ON(韓国/ソウル)
「Oikos」galerie16(京都)
2009 「アレゴリーの暴発」INAX(現:LIXIL)ギャラリー 2(東京)
「変形アレゴリー」イムラアートギャラリー(京都)
2010 「日野田崇展 -wound fever-」ガレリアフィナルテ(愛知)
2011 「新しい筋肉」イムラアートギャラリー(京都、東京)
2012 「古い松と保守の病 -Old Pine, Conservatism-」ガレリアフィナルテ(愛知)
2013 「ぼくのものだった世界/ The Universe once was mine」Elsa Art Gallery(台湾/台北市)
「音のない声」ドラド・ビーチ、プエルト・リコ(Fist Art Foundation Presents)
2014 「渦の中で渦巻く渦の中に見える渦の中の塵」イムラアートギャラリー(京都)
2015 「日野田崇-陶芸」アリアナ美術館(ジュネーブ、スイス)
2016 「世界の陰」Elsa Art Gallery(台湾/台北市)
2017 「空気の民」イムラアートギャラリー(京都)
2018 「世界を肯定する」ガレリアフィナルテ(愛知)
2019 「手と色形楽」イムラアートギャラリー(京都)
2020 「吼える手色形楽」ガレリアフィナルテ(愛知)

■主な個展

- 2021 「日野田 崇『膨らむ手色形楽』by imura art gallery」CADAN有楽町(東京)
- 2022 「景/手色形楽」エルサギャラリー(台北、台湾)
- 2023 「偶然を過ごすための手色形楽」イムラアートギャラリー(京都)
- 2025 「Something /Anything?」 ガレリア フィナルテ(名古屋)

■主なグループ展

- 1992 「The 16th Fletcher Challenge Ceramics Award」Auckland Museum(ニュージーランド/'94~'96, '98)
- 1994 サントリー美術館大賞展 '94「挑むかたち」(東京)
- 1999 「'99 兵庫の美術家」兵庫県立近代美術館(現:兵庫県立美術館/兵庫)
- 2003 「現代陶芸の華—西日本の作家を中心に—」茨城県陶芸美術館(茨城)
- 「TOSA-TOSA 2003 柳原睦夫と現代陶芸の尖鋭たち-現代陶芸の系譜-」高知県立美術館(高知)
- 「大地の芸術 クレイワーク新世紀」国立国際美術館(大阪)
- 2004 「京都府美術工芸新鋭選抜展 新しい波 2004」京都文化博物館(京都)
- 2005 「Walking Clay-Figurative Sculpture」Dai Ichi Gallery(アメリカ/ニューヨーク)
- 「やきもの新感覚シリーズ・50人」中部国際空港セントレアギャラリー(愛知)
- 2006 「SOFA New York 2006 International Exposition of Sculpture Objects & Functional Arts」
Seventh Regiment Armory(アメリカ/ニューヨーク)
- 「信楽を訪れた594人の陶芸家たち アーティストインレジデンスの軌跡」滋賀県立陶芸の森 陶芸館(滋賀)
- 「Takashi2: East Meets East Takashi Murakami and Takashi Hinoda」Casa Nova Gallery(アメリカ/サンタフェ)
- ※kornelia Tamm Fine Arts、Casa Novaによる企画、村上隆氏のプリント作品との2人展)
- 「SOFA Chicago 2006」Navy Pier(アメリカ/シカゴ)
- 2006-7「人のかたち-もうひとつの陶芸美 カルチャーギャップなやきものたち」滋賀県立陶芸の森 陶芸館(滋賀)、
兵庫陶芸美術館(兵庫)、静岡アートギャラリー(静岡)
- 2007 「Fired with Passion -Contemporary Ceramics of Japan」Asian Arts & Culture Center, Towson University
(アメリカ/メリーランド)
- 「兵庫の陶芸 いま、ここに何かが在る」兵庫陶芸美術館(兵庫)
- 「SOFA New York 2007」Seventh Regiment Armory(アメリカ/ニューヨーク)
- 「The Hands on Movement -Crafted Form in Dialogue-」Liljevalchs Konsthall(スウェーデン/ストックホルム)
- 「Asian Contemporary Art Fair NY 2007」Pier 92(アメリカ/ニューヨーク)
- 「Fragiles -Porcelain, Glass & Ceramics」Design Miami 2007(アメリカ/マイアミ)
- ※ゲシュタルテン出版社によるキュレーション
- 2008 「現代の造形 Life & Art -陶で彩る」東広島市立美術館(広島)
- 「Fragiles -Porcelain, Glass & Ceramics」Gallery 113(ベルギー)
- 「変装の達人 Masters of Disguise」Mint Museum of Craft + Design(ノースカロライナ /アメリカ)
- 東方當代芸術展「樂園」北京快樂公社(中国)
-

■主なグループ展

2008 「Asia Top Gallery Hotel Art Fair 2008」ホテルニューオータニ(東京)

「本当の根性 - 粹組、執着、戯れ True Grit - Frames, Fixations And Flirtations」McColl Center for Visual Art
(アメリカ／ノースカロライナ)

「ART ASIA Miami 2008」ART ASIA Pavillion(アメリカ／マイアミ)

2009 「アートフェア東京 2009」東京国際フォーラム 展示ホール(東京)

「Fragiles - Porcelain, Glass & Ceramics」Al-Sabah Art & Design Collection(クウェート)

「型を破る Breaking the Mold - Contemporary Chinese and Japanese Ceramic Sculpture」

The Dennon Museum Center, The Marshall M. Fredericks Sculpture Museum at Saginaw Valley State University
(ミシガン、アメリカ) ※Dai Ichi Galleryとのコラボレーション

2010 「アートフェア東京 2010」東京国際フォーラム(東京)

「SONAGI, 晴れ」KIMI Art(韓国／ソウル)

「PULSE New York」(アメリカ／ニューヨーク)

「San Francisco Fine Art Fair」(アメリカ／サンフランシスコ)

「NEXT Art Fair」(アメリカ／シカゴ)

2011 「SCOPE New York」(アメリカ／ニューヨーク)

「陶芸の世界 Mondes Ceramiques」Chapelle des penitents noirs Aubagne(フランス／オーバーニュ)

「日本陶芸の新世紀 - 伝統の枠を超え、土を抱く New Millennium Japanese Ceramics

: Rejection Labels & Embracing Clay」Northern Clay Center(アメリカ／ミネアポリス)

2012 「おとぎ話、ファンタジーと恐怖 Fairytales, Fantasy, and Fear」Mnit Museum Craft+Design

(アメリカ／ノース・キャロライナ)

「Ceramic/Figurative 北川宏人 林茂樹 日野田崇」新宿高島屋、日本橋高島屋(東京)

2013 「Yamato Dynamics」(ミヅマガギャラリー／ギルマン・バラックス／シンガポール)

「京畿世界陶磁ビエンナーレ 国際賞展(GICB 2013)」利川世界陶磁センター(利川市／韓国)

「連続体をつくりあげる 現代工芸の再考」(アリゾナ州大学美術館／アメリカ、2014年秋にかけて全米5カ所を巡回)

2014 「リアリズム」(アムステルダム／オランダ)

「第9回パラミタ陶芸大賞展」(パラミタミュージアム／三重県)

2015 「Objectif Terre-18me Biennale internationale de Cramic de Chteauroux」(Couvent des Cordeliers /
Muse-Htel Bertrand, Chteauroux / フランス)

「六甲ミーツ・アート 芸術散歩2015」六甲山上施設(兵庫)

2015-6 「日野田崇、エイドリアン・デュソー」(In Situ Gallery／Morge／スイス)

2016 「Very Addictive-Re extension of Aesthetics in Daily Life」(銀川現代美術館／中国)

「特別展Rencontre-いま、ここで、出会う《交差する現代陶芸コレクション》」(兵庫陶芸美術館／兵庫)

アーティスティック・プラクティス「フェイス・アップ!」アートフェア東京2016(東京国際フォーラム)

「ウェイズ・オブ・クレイ 未来への視点 第4回ジャカルタ現代陶芸ビエンナーレ」

(インドネシア国立ギャラリー／ジャカルタ、インドネシア)

■主なグループ展

- 2017 「アート・ステージ・シンガポール 2017」(マリーナ・ベイ・サンズ／シンガポール)
「日本をめぐって」(19 Paul Fort/ パリ、フランス)
- 2019 「走泥社 オーストラリアとのつながり」ニューカッスル・アート・ギャラリー(オーストラリア)
- 2020 「IROE展」館 游彩(東京)
- 2021 「タイル考〜陶芸の視座より」多治見市モザイクタイルミュージアム(岐阜)
「Generation -out of darkness」(雑誌「WIRED」日本版企画のオンライン展示)
- 2022 「リ・フレッシューズ 新収蔵作品展」(兵庫県立美術館／兵庫)
Art Collaboration Kyoto 2022 ACK Curates パブリックプログラム「時間の花」(京都国際会館／京都)
- 2023 「藝術台北2023」(Elsa Galleryより出展 JR東日本大飯店、台北／台湾)
「台北當代2023」(Edge Sectorにimura art galleryより個展形式で出展 台北南港展覽館／台湾)
- 2024 「アートフェア東京2024」(東京国際フォーラム展示ホール)
「工芸のちから」(大阪芸術大学 芸術情報センター1F展示ホール)
「嵯峨美の森」(京セラギャラリー／京都市)
「台北當代2023」(Edge Sectorにimura art galleryより個展形式で出展 台北南港展覽館／台湾)
- 2026 「Art Fair Tokyo 20」(東京国際フォーラム展示ホール)
「Thinking Hands」(中財アートギャラリー 檀国大学/龍仁市／韓国)
「なつやすみの美術館16 もしも“美術”がなかったら」(和歌山県立近代美術館／和歌山市)
「ゲンダイトウゲイ*ミニ*クロニクルーやきものはアートだ!」(兵庫陶芸美術館／兵庫)

■パブリックコレクション

土岐市(岐阜)
ヴァロリス美術館(フランス)
滋賀県立陶芸の森 創作研修館(信楽町)
INAX 世界のタイル博物館(常滑市)
国立国際美術館(大阪)
ジェームズ・ウォレス・アーツ・トラスト(ニュージーランド)
アリゾナ州立大学美術館(アメリカ)
ミント工芸+デザイン美術館(ノース・キャロライナ／アメリカ)
Muse Ariana(ジュネーヴ／スイス)
兵庫陶芸美術館(兵庫)
ニューカッスル・アート・ギャラリー(オーストラリア)
兵庫県立美術館(兵庫)
尾道市(広島)
ナポリ美術アカデミー美術館(イタリア)
和歌山県立近代美術館(和歌山市)
